

水稻の渇水対策（5月中旬以降版）

平成23年5月11日
宮崎県農政水産部営農支援課

1 早期水稻

現在、分けつ期にあります。用水不足や低温により全体的に生育の遅れが見られます。今月下旬から6月にかけて幼穂形成期を迎えますが、今後も用水が不足すると収量の低下など懸念されます。地域で話し合い、計画的な配水により用水の確保に努めます。

1) 分けつ期から幼穂形成期にあるものの対策

（水管理）

- ① 分けつ期は、2～3日毎に走り水程度のかん水で間に合わせます。
- ② 1株の茎数が20本程度になったら中干しを行います。強い中干しを行うと、ほ場によってはその後の水持ちが低下する場合がありますので注意します。
- ③ 中干し後の水管理は、間断かん水程度でもよいので、用水が確保できるよう計画的に配水を行う。
- ④ ポンプ揚水などにより、用水を確保する場合は、海水が混入しないように注意します。

（その他の管理）

- ① 6月になると箱施薬の効果が低下し、いもち病や害虫の発生が多くなってくるので、観察に努め、特に出穂期頃のいもち病やカメムシなどに注意し、地区防除基準により防除を行います。
- ② 今年の幼穂形成期は、平年よりやや遅れる見込みであり、このため穂肥は、必ず幼穂長（1cm位）を確認した上で、葉色に応じ、適量を適期に施用します。
※なお、元肥施用後に田植えが大幅に遅れたり、田植え後も乾田化するなどしたほ場で、葉色の薄い状態が続いている場合には、早めに分けつ肥を施用します。

2 普通期水稻（飼料用稲含む）

現在、育苗・田植え時期にあります。用水不足により代かきや田植えが遅れている地域があるため、育苗日数が延び、苗の徒長・老化・病害の発生が懸念されます。

また、既に田植えが終わり、活着期にあるものは、用水不足により活着と分けつの遅れが予想され、さらに少雨傾向が進むと枯死するおそれがあります。

1) 育苗期から田植え時期にあるものの対策

地域で話し合い、計画的な配水により用水の確保に努め、田植が出来るよう心掛けます。

(老化苗対策)

- ① 育苗日数が延びることを想定し、播種量は厚播きとにならないよう注意します。
- ② 苗が伸びやすいため、温度管理は高温とにならないよう注意します。
- ③ 播種後25日を過ぎると肥料切れしてくるので、1箱当たり成分量で0.5g程度の窒素を追肥するとともに、散布後かん水して葉焼けを防ぎます。
※(例) 苗箱1箱当たり「硫安3g」を0.5%の水に溶かして散布
- ④ 寒冷紗等で遮光したり、苗箱の間隔を広げて通気を良くします。また、苗への灌水は出来るだけ控えます。
- ⑤ 育苗期間が長引くと苗いもちが出やすいので発生に注意します。

(田植え対策)

- ① 地域で話し合い、計画的な配水を行うことにより、代かき・田植えを実施します。
- ② 水持ちの悪い水田では代かきを丁寧に行い、また畦畔からの漏水を防ぎます。
- ③ 苗が軟弱徒長(草丈が23cm以上)となり、移植作業に支障を来す場合は、第2葉の中央部(地面から15~18cm)で剪葉し、植え付けます。
- ④ ほ場内に通水用の溝を作り、短時間に水が回るようにします。

2) 活着期から分けつ期にあるものの対策

- ① 節水の必要がある場合は、分けつ期の間は、2~3日毎に走り水程度のかん水で間に合わせます。
- ② 除草剤の散布は、用水が十分に確保されるまで見合わせます。
- ③ いもち病や害虫の早期発見に努め、発生を確認したら防除します。

(その他)

- ① 育苗日数が、40日以上経過し、老化・病害により移植に耐えられない場合が想定されるため、早めに育苗センター間で連携を図り、苗の手配を組織的に行います。
- ② ポンプ揚水などにより用水を確保する場合には、海水が混入しないように注意します。